

イエスは大きな声で

ヨハネの福音書 12 章 44-50 節

はじめに

今日は、ヨハネの福音書 12 章の最後の所を学びます。ヨハネの福音書において、12 章は大きな区切りとなっています。13 章からは、イエス様と弟子たちとの対話、そして十字架と復活の出来事が書かれています。つまり、12 章までが、イエス様と群衆との対話がかかっているのです。今日の聖書箇所である 12 章の最後の所で、イエス様は群衆への最後のメッセージを語っています。しかも 44 節を見ると、「**イエスは大きな声でこう言われた**」とあります。この「大きな声で」という言葉は、「叫び声をあげる」「わめく」とも訳される言葉です。「叫び声をあげる」「わめく」というのは、おもにイエス様に癒しを求めてやって来る人々に使われる言葉です。つまり、癒やしを求めてイエス様に必死に訴える、そういう時に人々は「大きな声を上げて叫び、わめく」のです。しかし今日の聖書箇所では、逆に、イエス様が群衆に向かって、「大きな声を上げて叫び、わめく」のです。ここには、群衆に対するイエス様の必死な訴えがあるのです。それは、群衆に対するイエス様の最後のメッセージであるからです。イエス様はここで、最後に群衆にどうしても語っておきたいことを、必死に訴えているのです。ではイエス様は、最後に群衆に向かって、大きな声で何を叫ぶのでしょうか。

1. イエスを信じる者

44-46 節で、イエス様はこう言われます。「**わたしを信じる者は、わたしではなく、わたしを遣わされた方を信じるのです。また、わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのです。わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれも闇の中にとどまることのないようにするためです**」。ここでは、イエス様を信じる人は、どんな祝福に与るのが語られています。まず第一に、イエス様を信じる人は、イエス様を信じるだけでなく、イエス様を遣わされた方を信じるようになります。イエス様を遣わされた方とは、49 節を見ると、「**わたしを遣わされた父**」とあります。ですから、イエス様を遣わされたのは、「父なる神様」です。イエス様は、唯一の生ける真の神様を「父」と呼んでいます。そしてご自分を「神の子」とすることによって、ユダヤ人たちの反感を買うわけですが、イエス様はそんなユダヤ人に向かって、「唯一の生ける真の神様を信じるには、わたしを信じなければならない」と語っているのです。逆に言えば、「わたしを信じなければ、唯一の生けるまことの神様を信じているとは言えない」と語っているのです。イエス様は、ヨハネ 14：6 でこう言われます。「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできま**

せん」。私たちは、イエス様を信じなければ、唯一の生ける真の神様を知ることはできないのです。イエス様によれば、神様を信じているけれども、イエス様を信じてないというのはあり得ないのです。イエス様を信じていなければ、その人は神様をも信じていないのです。それは、自分たちこそ神の選民だと自負しているユダヤ人にとっては、痛烈なメッセージでした。

イエス様は、こうも言われました。「わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのです」。神様は霊ですから、神様を見ることはできません。しかしイエス様を見た人は、神様を見たときえ言うことができるのだと言うのです。ヨハネ 1：18 には、こうあります。**「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」。**私たちは、神様だけでなく、イエス様も見ることがありません。しかし、聖書を通して、地上の生涯を歩まれたイエス様の姿を見つめれば、神様の姿が見えてくると言うのです。私たち人間は、イエス様を通してしか、唯一の生ける真の神様を知ることはできないのです。イエス様以外の道のりで、神様と出会うことはできないのです。イエス様を信じる人の祝福とは、第一に、唯一の生ける真の神様と出会えるということです。

第二に、イエス様を信じる人は、闇の中にとどまることがなくなります。「闇」とは、何でしょうか。ヨハネという人が、「闇」というものを、どのように捉えていたかは、Ⅰヨハネ 2：11 を見ると、よく分かります。**「自分の兄弟を憎んでいる人は闇の中にいて、闇の中を歩み、自分がどこへ行くのかが分かりません。闇が目を見えなくしたからです」。**闇の中にいる人は、自分がどこへ行くのかが分かりません。自分の行くべき道が見えないのです。また自分の姿も見えず、神様も見えないのです。自分が何者かが分からず、どのように生きればよいのかが分からないのです。その結果、人を愛せず、人を憎むことしかできないのです。闇の中にいる人は、神様が見えないのです。イエス様は、「光」として世に来られました。私たちに神様が見えるようにしてくださったのです。私たちは、イエス様を見れば、神様が見えるのです。イエス様を見つめれば、神様が見えてくるのです。私たち人間が、闇の中から抜け出すためには、イエス様を信じ、イエス様を見つめなければなりません。イエス様を見つめていけば、私たちの闇は少しずつ晴れて、光が射し込んでくるのです。そして、神様が見えてくるのです。そして、神様を通して、自分がどこへ行くべきか、どのように生きればよいのかが見えてくるのです。また自分が何者かが見えてくるのです。私たち人間は、イエス様を信じる時に、闇の中から抜け出すことができるのです。

2. イエスのことばを受け入れない者

47-48 節には、イエス様のことばを受け入れない人について語られています。**「だれか、わたしのことばを聞いてそれを守らない者がいても、わたしはその人をさばきません。わたしが来たのは世をさばくためではなく、世を救うためだからです。わたしを拒み、わたしのことばを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことば、それが、終わりの日にその人をさばきます」。**イエス様は意外にも、「だれか、わたしのことばを聞いてそれを守らない者がい

ても、わたしはその人をさばきません」と言われます。イエス様は、ご自分のことばを聞いても守らない人をさばかないと言われるのです。なぜでしょうか。なぜイエス様は、ご自分のことばを守らない人をさばかないのでしょうか。それは、「わたしが来たのは世をさばくためではなく、世を救うためだから」だと言われるのです。イエス様が二千年前に、この世に生まれ、父なる神様に遣わされた目的は、私たちをさばくことではなく、私たちを救うことであつたのです。だからイエス様は、私たちをさばかないと言われるのです。使徒パウロも、こう言いました。「**今は恵みの時、今は救いの日です**」(Ⅱコリント 6:2)。私たちは今、恵みの時代に生かされています。イエス様は今、私たちをさばこうとしているのではなく、救おうとしておられるのです。

しかし、48 節には、こうもあります。「わたしを拒み、わたしのことばを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことば、それが、終わりの日にその人をさばきます」。今は恵みの時であり、救いの日です。今は私たちをさばかないと、イエス様は言われますが、それが永遠に続くわけではありません。「終わりの日」には、私たちは確かにさばかれるのです。「終わりの日」には、イエス様のことばを聞いても守らない人、イエス様を拒み、イエス様のことばを受け入れない人は、確かにさばかれるのです。「終わりの日」とは、いつでしょうか。二つの意味があると思います。一つは、イエス様がこの地上に再び来られる世の終わりの時です。その時、イエス様は「最後の審判」をされます。その時、イエス様を拒んだ人、イエス様が差し出した救いの手を振り払う人は、さばかれるのです。そして永遠の地獄の刑罰へと入れられるのです。「最後の審判」の時は、いつ来るか分かりません。イエス様は、その時は誰も知らず、盗人のように来ると言われます。「終わりの日」のもう一つの意味は、私たちが死を迎える時です。ヘブル 9:27 には、「**人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている**」とあります。私たちの生涯が終わる時、私たちはイエス様にさばかれるのです。私たちは、生きている間に、イエス様を拒むか受け入れるか、イエス様のことばを聞いて守るか守らないかを決断しなければならないのです。その決断の猶予は、私たちが生きている間だけです。つまり私たちが死を迎える時までです。私たちが生きている間は、恵みの時、救いの日なのです。しかし私たちの生涯が、いつ終わるかは誰も知りません。今日終わるのか、一週間後に終わるのか、一年後に終わるのか、誰も知りません。神様だけが知っていることです。今は恵みの時、今は救いの日、今はさばかれない、だからいつかイエス様については真剣に考えようなどと、呑気なことは言うてはいられません。イエス様がいつこの地上に再び来られるか、私たちの生涯がいつ終わるのかは、誰も分からないからです。ですから私たちは今、イエス様について真剣に考えなければなりません。イエス様を拒むのか受け入れるのか、イエス様のことばを聞いて守るのか守らないのか、真剣に考え、決断しなければなりません。イエス様は、こう言われます。「**光があるうちに…光を信じなさい**」(ヨハネ 12:36)。

3. イエスが話したこと

さて、49-50 節には、イエス様が話したことばは、どういうものなのかが語られています。「わたしは自分から話したのではなく、わたしを遣わされた父ご自身が、言うべきこと、話すべきことを、わたしにお命じになったのだからです。わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。ですから、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのまま話しているのです」。イエス様が話したことばは、イエス様が考えついたことばではありません。イエス様が話したことばは、父なる神様が言われたことばを、そのまま話しているのです。それゆえ、イエス様のことばは、唯一の生ける真の神様のことばなのです。イエス様は、父なる神様に命じられたことばを語られたのです。父なる神様が、イエス様に命じられたことばとは、何でしょうか。それは、一言で言えば「永遠のいのち」です。「永遠のいのちを得よ」ということが、父なる神様がイエス様に命じられたことであり、イエス様が私たちに話されたことばなのです。

「永遠のいのち」とは何でしょうか。ヨハネ 17：3 で、イエス様はこう言われました。「**永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです**」。「永遠のいのち」とは、唯一の生ける真の神様とイエス様を知ることです。聖書で、「知る」という言葉は、「交わり」を意味します。つまり、「永遠のいのち」とは、唯一の生ける真の神様とイエス様との交わりに生きるいのちのことです。それは、死んだ後に与えられるものではありません。イエス様を信じた時から、与えられる「いのち」です。イエス様はこう言われました。「**わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています**」。イエス様を信じた人は、その時から「死からいのちに移っている」のです。つまりその時から「永遠のいのち」を持っているのです。Ⅰヨハネ 5：13 にも、こうあります。「**神の御子を信じているあなたがたに、これらのことを書いたのは、永遠のいのちを持っていることを、あなたがたに分からせるためです**」。イエス様を信じた人は、すでに「永遠のいのち」を持っているのです。イエス様を信じた人は、「肉体のいのち」とは別の、神様とイエス様との交わりに生きる、「新しいいのち」である「永遠のいのち」に生かされているのです。

おわりに

イエス様は、群衆に向かって大きな声で叫んで、最後のメッセージを必死に訴えました。それは、唯一の生ける真の神様に会うためには、イエス様を信じなければならないということです。そして、闇の中から抜け出すためには、イエス様を信じなければならないということです。イエス様を信じる時に、人は「新しいいのち」である「永遠のいのち」に生かされるようになるということです。私たちは、「終わりの日」が来るまでに、イエス様を信じるかどうか、決断しなければなりません。しかし、「終わりの日」がいつ来るかは、誰も知りません。イエス様は、大きな声で必死に訴えておられます。「わたしを信じて、永遠のいのちを得よ」と。そうであるならば、私たちもイエス様のことばを、真剣に考えなければなりません。ぜひ「光があるうちに」、光であるイエス様を信じてもらいたいと思います。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、イエス様を通して私たちに語られます。イエス様を通して今も、「永遠のいのちを得よ」と必死に訴えておられます。今は恵みの時、救いの日です。どうか、「終わりの日」が来る前に、私たち一人ひとりがこの大事な決断をすることができますように。願わくば、ここにいる一人ひとりが、イエス様を信じて、神様とイエス様との交わりに生きる「新しいいのち」に生かされて歩むことができますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。